

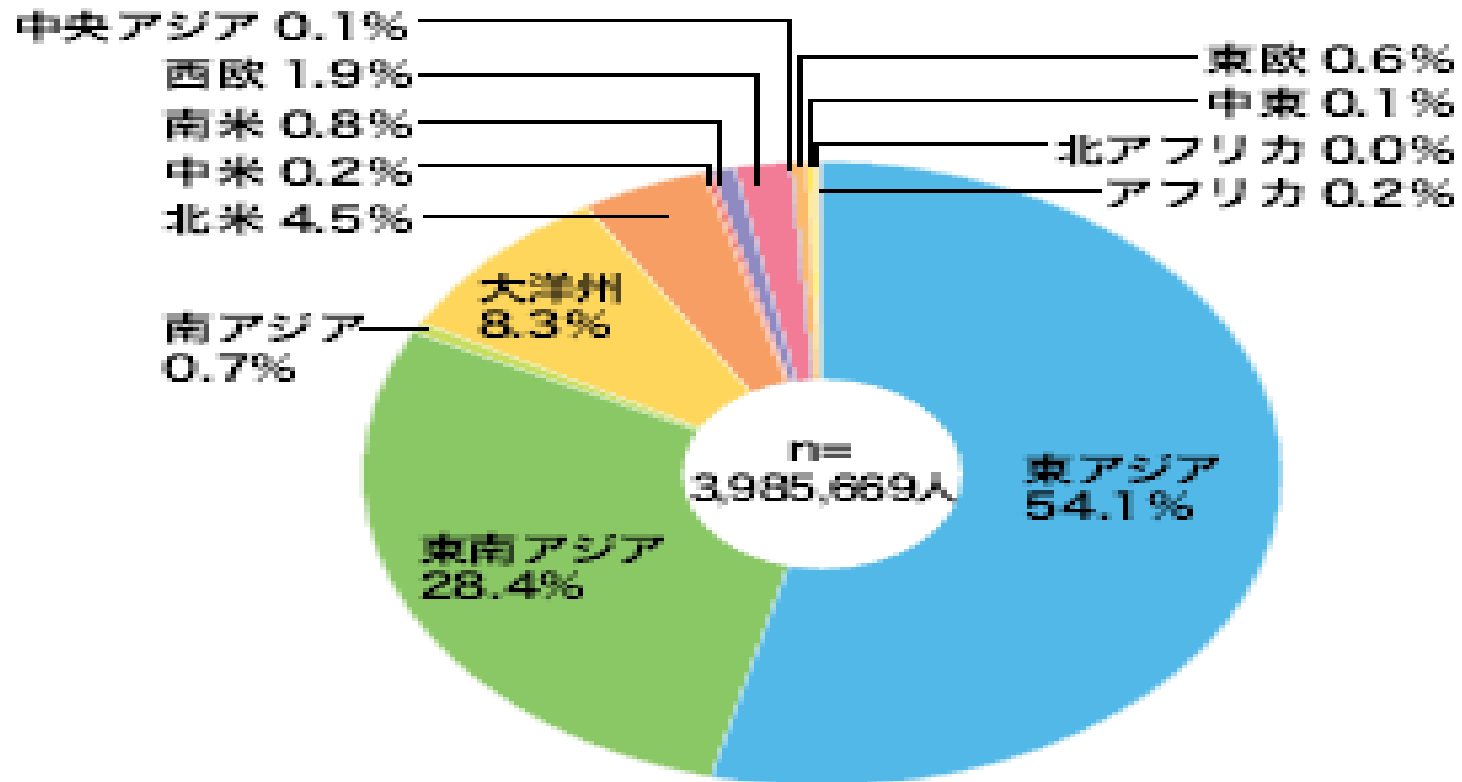
インドネシアの高等学校における日本語教育 のコースデザインと評価の実情



アグス・スヘルマン・スルヤディムリア
(パジャジャラン大学)

1. はじめに

グラフ 1-2-3 地域別学習者数の割合



2012年 海外日本語教育機関調査結果

2012年 順位	2009年 順位	国・<地域>	学習者(人)		
			2012年	2009年	増減率 (%)
1	2	中国	1,046,490	827,171	26.5
2	3	インドネシア	872,411	716,353	21.8
3	1	韓国	840,187	964,014	▲12.8
4	4	オーストラリア	296,672	275,710	7.6
5	5	<台湾>	233,417	247,641	▲5.7
6	6	米国	155,939	141,244	10.4
7	7	タイ	129,616	78,802	64.5
8	8	ベトナム	46,762	44,272	5.6
9	11	マレーシア	33,077	22,856	44.7
10	12	フィリピン	32,418	22,362	45.0

日本語学習の目的

- 日本語でのコミュニケーション (85.2%)
- 日本そのものへの興味」 (74.1%)
- 日本への観光旅行 (18.2%)

課題

- 教師不足
- 教師の日本語能力
- 教師の教授方法

- インドネシア政府によるカリキュラム改定による影響も見逃せない。このような状況の中、インドネシアでのコースデザインの実態に焦点を当て、どのような教育目標の基に外国語科目が位置づけられ、指導が実践されているのか。
- 初等・中等・高等教育機関間のつながりや、日本語力評価の捉え方などを探り、コースデザインと評価の実情を概観し、21世紀に貢献するグローバル人材養成に向けて、歩み始めたい。

2.インドネシアの高校における日本語教育の現状

- インドネシアの高等学校、100校にアンケート調査を行った。
- 回収率は85%で、85校から回答を得た。
- 一般高等学校及び専門高校
- 調査期間:2015年10月15日～2015年12月15日

- どのような教育目標の基に外国語科目が位置づけられているか。
- 定量的分析を行う
- 自由記述形式のアンケート調査ならびにインタビュー調査により定性的分析
- 総合的にインドネシアの高等学校の全体像を描き出す。
- インドネシア日本語教育の発展ために貢献することを目的とする。

アンケート調査は、以下の7つの質問 に対して回答してもらった。

● I. その教育機関の教育目標は？

日本語の習得も積極的に展開されるべき科目であると教育委員会の会議によって決められた。

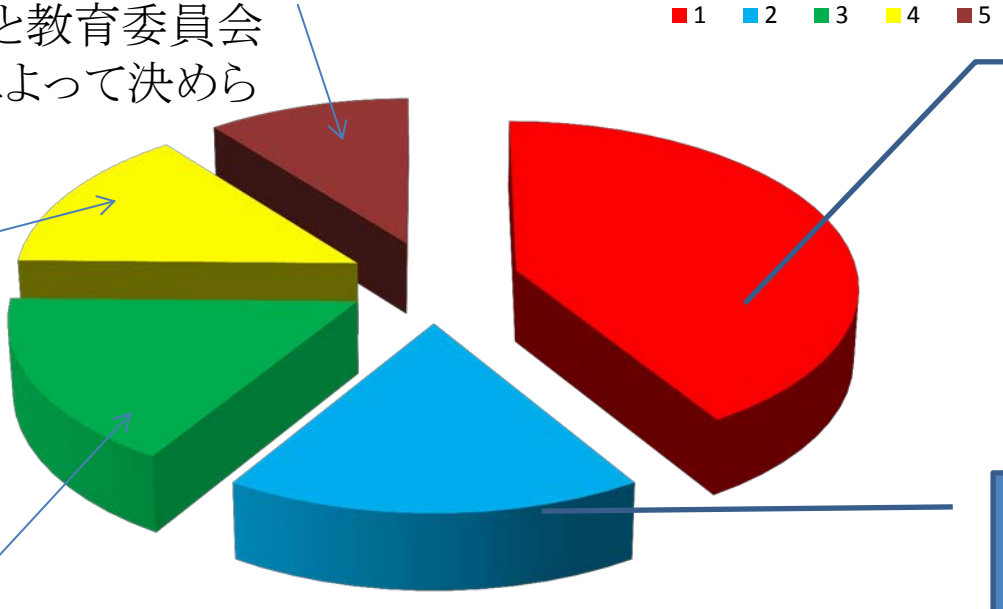
■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5

英語とドイツ語の習得に加えて、他の言語と文化の紹介 (35校)

英語の習得に加えて、日系企業に就職できる日本語能力の養成 (12校)

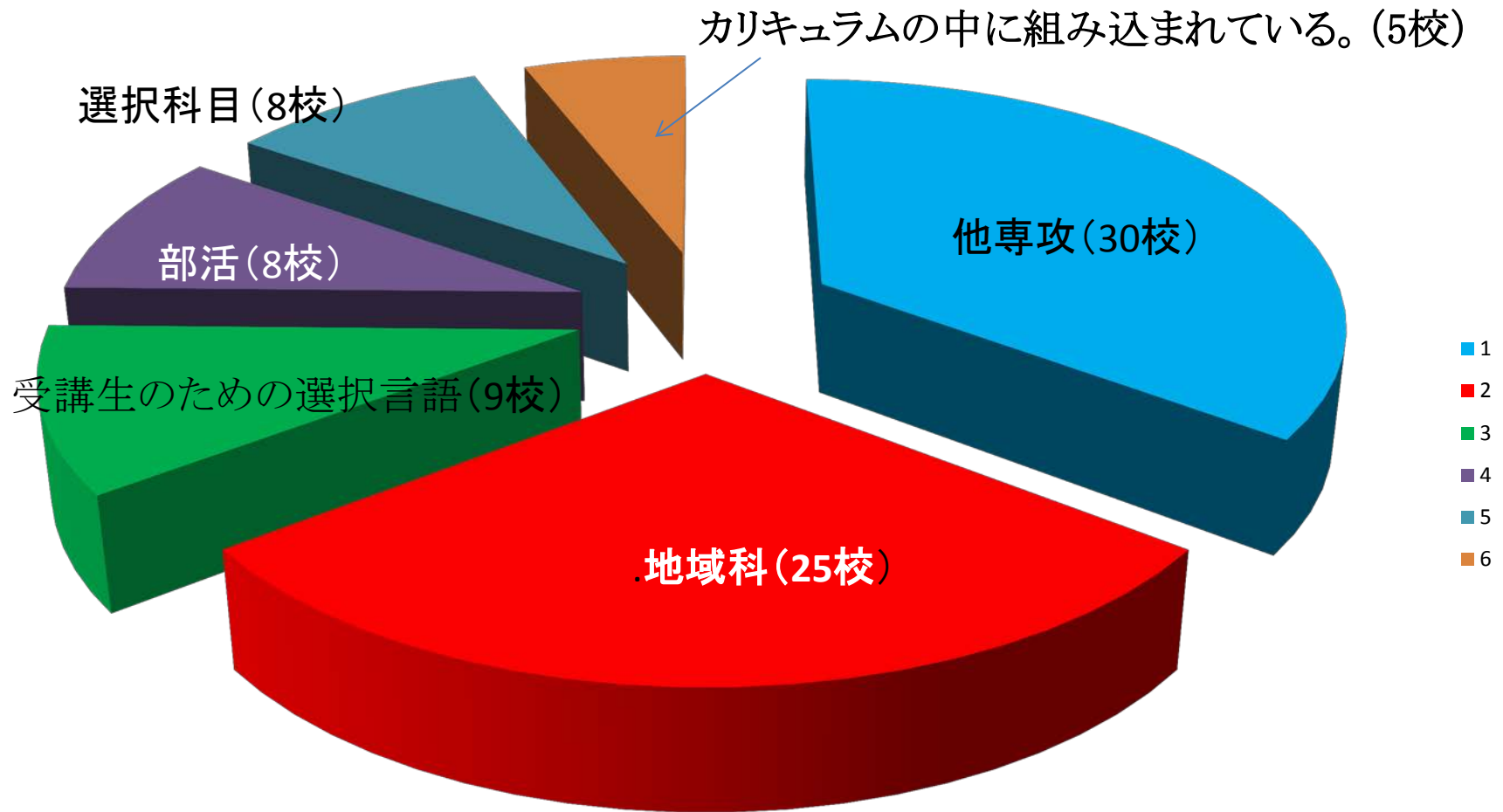
日本語の指導 (15校)

外国語によるコミュニケーション能力の習得と文化理解 (14校)



- 以上のように、国際語の英語の習得はもちろん、将来仕事で使える実践的な日本語能力の養成を教育目標にしている機関が多いことが読み取れる。

Ⅱ. その教育目標における外国語教育の位置付けは？



- 様々な専攻の履修科目として、また、選択外国語の一つとして位置づけられていることが多い。
- 日本語は英語に続くグローバルな言語としての位置づけになっている。

Ⅲ. その位置付けに沿った指導とは？また、そういう指導がどのくらい行われているか？

各教育段階のカリキュラムによって定められたシラバスと日本語MGMP(科目担当教師協議会)によって調整される。(4校)

担当講師は、中部ジャワ州におけるMGMP(科目担当教師協議会)に積極的に参加。(10校)

教育省と国際交流基金の基準をもとに定められた日本語教育シラバス(20校)

教育省が定めた日本語シラバスをもとに実施している。(25校)

文法と文化を学べるのに十分な受講時間を設けている。(21校)



- 指導はシラバスに沿って行われるが、アンケート調査から教育省P4TK(語学教員研修センター)、国際交流基金、MGMP(科目担当教師協議会)、KTSP(各教育段階のカリキュラム)などが作成したシラバスに沿って日本語教育が行われていることが明らかになった。
- これらのシラバスの共通点は、日本語のコミュニケーション能力を養成しようとする点である。日本語のコミュニケーション能力の養成を通して、日本との関係が深まり、日本語を通してのグローバル化を目指していると言えないだろうか。

IV.高校の日本語教育は、大学の日本語教育へ繋げる教育を行っているか。それはどういう教育か？



- 1. 高校ではひらがなやカタカナを使用せず、ローマ字を使って学ぶことが大学と異なる部分。(26校)
- 2. 高校で学ぶ日本語は基礎的なレベルであり、大学で同じ内容を学ぶ可能性がある。(25校)
- 3. 関連していない。(15校)
- 4. 大学で学ぶ準備を兼ねて日本語教育を設定している。日本語講師も日本語能力試験N3級以上の大学生である。(10校)
- 5. 大学における日本語のカリキュラムについてあまり理解していない。(5校)
- 6. 大学で学ぶ準備を兼ねて日本語教育を設定している。(4校)

- 大学とのアーティキュレーションを考慮して日本語教育を行っている高校とそうではない高校があることが判明した。
- 大学に進学する生徒が多い高校では大学とのアーティキュレーションを考えて、行っていると思われるが、そうではない高校では、日本語や日本文化理解を中心に教育を行っていると思われる。
- 大学とのアーティキュレーションを考えて、しっかりした日本語能力を身につけて、インドネシアのグローバル化に貢献しようとする考えと、日本の言語や文化に対する理解を深めて、インドネシアのグローバル化に貢献しようとする考えと2つあるように思えるが、グローバル人材が外国語能力の有無にかかわらず、いい人間関係を構築していける人だという考え方からすると、どちらも十分納得が行くものだと思われる。具体的な教育内容に関しては、あまり具体的な回答がなかった。

V. 高校と大学の日本語教育者が集まって、会合を行っているか。もし、会合が持てたらどういうことを話し合いたいか？

- インドネシア日本語教育学会と科目担当教師協議会の会合(22校)
- 講師が大学生のため、授業の評価を確認するために定期会合を行なっている。(18校)
- Jabodetabek (ジャカルタ・ボゴール・デポック・タンگران・ベカシ)において日本語教師のための月1回の定期会合がある。国際交流基金主催の学会やワークショップで大学関係者と会う機会がある。(15校)
- 科目担当教師協議会に講師を参加させる(12校)
- 定期的な会合はない。(バンドウン市)(10校)
- インドネシア日本教育学会南スラウェシ支部主催の勉強会が月1回実施されている。(8校)

- 国際交流基金主催の学会やワークショップ、インドネシア日本語教育学会と科目担当教師協議会の会合などに参加している日本語教育関係者が多いことがわかった。具
- 体的に何について話したいかがあまりはっきり出てきていない。
- 日本語教授の方法論など、実践的なことからで悩んでいる日本語教育関係者がまだまだ多いような印象を受けるが、文法、語彙、発音、読み・書く・話す・聞くの4技能、や社会文化能力や語用論的能力などの具体的な教え方に関する知識、スキルをどうしたら身につけることができるかという話し合いの場をもっと積極的に持つ必要があると思われる。

VI. 日本語の評価はどのように行っているか？

評価は実際にどうやったらいいと思うか。

- 評価方法として、受講生に対して日本語教育に関するアンケートを行なう。(26校)
- 小テスト、中間テスト、学期末テストと同時に実施。(21校)
- 評価は少なくとも、基礎的(各課)な能力を習得した後に実施しており、定期的にかつ包括的に行うべきである。講師の自己評価はもちろん、活用している方法及びメディアが適切か不適切かについても評価される。(17校)
- 6ヶ月で3-4回評価している。評価の日程は毎日1回、3か月、そして学期末。評価方法は、筆記及び設問である。(14校)
- 授業は順調に進められている。評価は、継続的及び全国一律で実施されるべきである。(7校)

- 日本語の力がどのぐらい付いたかという評価は各機関でテストを用いたアンケート形式で行われているようである。
- しかし、Can-Do Statementsに基づいた評価がまだ行われていないような印象を持った。コースが始まる時に、今、何がどのぐらいできるかという自己評価をもらい、コース終了時に何がどのぐらいできようになったかの自己評価を行い、事前と事後の評価の変化を知り、次の段階の日本語指導に活かすという視点がまだ十分ではないように思う。
- 試験によるテストとCan-Do Statementsに基づいた自己評価、さらに、教師によるCan-Do Statementsの他者評価など、総合的に学習者の日本語能力を分析することが必要である。それから、グローバル人材育成に繋がるような観点からの評価も今後求められる。

VII. 評価のあとのコメントやフィードバックは、 適切に行われているか

1. 時間があれば、具体的な評価や課題を探求するが、時間がなければ評価のみを通知する。(31校)
2. 継続的に評価を実施している。(26校)
3. 今後の授業のために、評価結果を通知する。(21校)
4. はい。国際交流基金からの情報更新による方法で評価結果を通知する。(4校)
5. ない。(3校)

- 評価は行っているが、一人ひとりに対する具体的なコメント、フィードバックは時間的な問題からかあまり行ってはいないようだ。
- 学期最後の試験だとなかなかフィードバックの時間を設けることは難しいと思われる。代わりに、学期中に宿題や小テストなどで、一人ひとりにコメント、フィードバックをするような工夫をしたらどうであろうか。また、短時間の個人面接などをして、教師と生徒の心理的な距離を縮め、コメント、フィードバックがしやすくなるような学習環境作りも考える必要があるだろう。

3. まとめ

- インドネシアにおいては、国のグローバル化実現のために、英語と日本語能力を有するインドネシア人のグローバル人材育成が大きな目標となっているように思われるが、インドネシアにおけるグローバル人材とはどういう人で、どういうことができる人かという認識がインドネシアの日本語教育関係者の間でまだ十分に共通理解が得られていないように思われる。
- グローバル人材育成のための教育内容・シラバスの開発、それに必要な主教材並びに補助教材の作成、ITの活用、学習者の評価並びにシラバス・教材・学習環境の評価、フィードバック体制など、解決すべき問題が数多くあることを認識し、日本語教育を通してインドネシアのグローバル化に貢献しながら世界平和に貢献するグローバル人材育成のための努力を始めたところである。



ご静聴ありがとうございました

TERIMA KASIH